

黒正 巖著

百姓一揆の研究 続篇

本書は、故黒正巖博士の百姓一揆にかんする論考のうち、博士の著書に収録されていぬものを集めて編集されており、このたび大阪経済大学創立二十五周年の記念事業として同大学研究叢書が刊行されるに際し、前身昭和高商以来のゆかり深く、かつ初代学長であつた故博士の論文集をその第一冊として上梓されたものである。表題は、名著「百姓一揆の研究」にちなんでつけられた。

戦後における百姓一揆の研究は、民主的運動の昂揚ともない、その量質においていじりしい飛躍をとげたが、黒正博士の研究はこれらの基盤となつた戦前の代表的業績の一つであり、その学説史上の意義を一言にして要約するならば、百姓一揆の研究に統計・分類・定義等のアカデミックな方法を導入したという点に求めることができる。その意味では、大正から昭和にかけて開花した市民的史学の一ピークともいえるのであつて、それは

博士の次のような自己の研究態度の表明においても明らかになうに思われる。「封建的支配の苦痛を脱却せんが為めに、雄々しくも自己の支配階級に反抗して倒れたる農民の心情を余りに散文化してしまつた。折角の社会劇を淡々たる水の如き理窟を以て、説き去つたとの謗を受けるであらう。然し私は詩人ではない。詩を理窟にする事が恐らく私達の使命であらう故に、私はその謗を甘受するであらう」(三七頁)。

さて、全篇は六章から成つている。すなわち、第一章徳川時代の百姓一揆、第二章百姓一揆の概念および論争、第三章地域別百姓一揆、第四章天保時代の百姓一揆、第五章徳川時代の農民逃散および漁民騒動、第六章明治初年の騒擾である。附録に百姓一揆年表を掲げ、また巻末には黒正博士年譜と著書論文目録をあげている。第一章は、大正一五年の京大での特別講演を中心とし、全体の総論をなす地位を与えられている。第二章の諸論文および第四章のそれは、小野武夫博士等との間に展開された有名な百姓一揆の革命性論争に直接間接のかかわりをもち、論争の性格の濃いものであるが、それだけに博士の方法をあ

らわに示しているといえ、逆に、前記のごとき研究史上の意義を明確にする点では、第三章ないし第五章・六章を欠くことができない。こうして、博士の体系は後学であるわれわれにきわめてわかりやすい形で提供されることとなつた。編集当事者の苦心の察せられるところである。

附録の年表は、今日でも百姓一揆にかんする唯一の全国的年表として利用されている。いわゆる黒正年表を、京都大学農学部農史研究室において増補訂正したもので、江戸時代を通じて一六三五件(旧年表一二四〇件)の百姓一揆が収録され、研究者にとつてその利用価値はきわめて高い。

しかし、本表をより完全な年表作成のための中間報告であるとされる編者の謙辭に甘え、あえて望蜀の感を連ねるならば、たとえば国訴のごとき戦後の研究が明らかにした農民闘争の型態は、恐らく黒正博士の一揆概念に含まれぬからであらうか収載されていないが、一方に村役人のリコール闘争などが入つていない点などからみて、その基準にやや腑におちない点がないでもない。研究の展開にもなる成果としてとどんどのせてもよいの

ではないか。

もとより、これは本書および年表の価値をいさかでも減ずるものでないこと、上來述べきたつた通りである。研究叢書の今後における発展をお祈りして紹介の筆をおく。

(昭和三四年九月刊、A5三四七頁、定価六五〇円、ミネルヴァ書房発行) (朝尾直弘)

本庄栄治郎編

近世の大阪

最近、幕藩体制の研究が進むにつれ、この社会体制のうちに占める大阪の地位の重要な意義が再評価されつつあるが、他方、一般世間においては、いわゆる大阪ブームなるものが文学演芸を中心に主としてマス・コミの媒体を通じて広く伝播している。

しかし、現実の大阪は必ずしもそのように盛んではない。「関西経済の地盤沈下」という語によつて示された現状にたいする疑問と不安感は、大阪の経営者をして今後の歩むべき道を模索せしめるに十分なものがあつたようで、ここに単に現状にとどまらず、かつて「天下の台所」とまで称せられた近世の大阪

をふり返ろうという気運の生じる遠因があつた。本書はこのような意図により、昭和三三年から翌三四年にかけて行われた関西経済同友会における一連の講演原稿をもとに編集されている。

内容は、大阪町人の家訓と気質について宮本又次、同じく学問と心学について竹中靖一、商業と蔵屋敷にかんし黒羽兵治郎、大阪と近江商人は江頭恒治、維新後における経済近代化の問題と大阪については堀江保蔵の諸氏が記述し、巻頭に編者本庄博士のこれを総括した一文がおかれている。それぞれの主題においていづれ劣らぬ練達の専門家の記したものにだけにくさぶらぬ安定感があり、近世の大阪の概要を知るに便利なものである。(関西経済同友会発行、昭和三四年八月刊、A5二二五頁) (朝尾直弘)

編集後記

月ロケットに象徴される自然科学の際限ない発展は、私たちのこれまで抱いていた歴史像にも大きな変革を迫つてるように思いま

す。

人類史または世界史としての像を定着させる仕事は、いつそう緊要な課題となつてきました。しかし、現状はそれぞれの国の個別史の専門家はいても、それらを統一的に把握し、全体像を描く試みをする人はきわめて少ないといわなければなりません。また、そうした見地から逆に各国史に光を当ててみることも十分おこなわれているとは申せない状況です。

史学・地理学・考古学の共通の広場としてある史林は、こうした課題にこたえるための条件にはきわめて恵まれているのですが、御投稿をお待ちして居ります。

(朝尾直弘)

一九六〇年二月五日印刷 定価一八〇円
一九六〇年三月一日発行

史林 (第四三巻 第二号)

発行所 史学研究会

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
理事 長 宮崎市定
編集主任 赤松俊秀

印刷所

京都市下京区西七条御所ノ内東町三九
中村印刷株式会社